

君の中に

君の名を告げる時が来た。

古の時を感じるのは君だけではない。

まともな者たちを嘲笑うが良い。彼らは彼らの強さ故に滅びるのだ。彼らは、決して亡くならない永遠のものではなかったのだ。

そう叫んだ者もいた。

そう信じた者もいた。

彼らに挑戦し、破れ、そして諦めの果てに死んだ者もいた。

そう、泰平の腹が座る前までは君は輝いていた。神の祝福を得ないまでも、少なくとも君は美しかった。

十五代に続く揺りかごを経験し、赤子の姿で大人の知恵を使わなければならなかったのだ。

元の姿に戻るにはあまりにも時間がかかり、そして揺り戻しの波に幾十にも袖を通さなければならぬのだ。

右に左、そして左から右、明治の朝から平成の夕闇まで、彼らは自信と自惚れ、そして謙虚と卑下とを取り違えて袖を通してしまった。

姿は赤子のままなのに！

だが私は感じる。いや、感じる事ができる。たしかに息づいている。どこかに息づいている。

静かなる佇まいが美しく、気品に満ち、そして愛おしい君たちよ。
そろそろ出てくるが良い。

歴史の表舞台に、再び君の息づかいを、君のその表情を見せるのだ。

君は本来美しいのだ。本来は優しいのだ。そして、本来正しいのだ。

そして、生の喜びだけではなく、その難しさに対しても誰も真似し得ない美しい顔を与えることができた筈なのだ。

今からでも遅くはないのか。いや、遅いのか。

それは、我々の子や孫が現してくれる筈だ。

もう永久にそれはないのかもしれない。そうなのかもしれない。

ただ、いつの日か君たちが再び立ち現れることを願うこと、想うこと、そして君を慈しむことはさせて欲しい。

我々も、生きていけるのだ。